

## 「喜びに至る『悲しみ』」 (要旨)

聖書箇所：マタイ 5:4

## 【1】悲しむ者は幸い

悲しみは不幸である、誰もがそのように考え、またそう実感しているのではないのでしょうか。ところが主イエスは、「悲しむ者は幸いです」(5:4)と教えられました。この教えを私たちはどのように受け止めたら良いのでしょうか。死別の悲しみの中にある人、願った道が閉ざされ悲しみに沈んでいる人、戦禍の中で悲嘆に暮れている人、自分の不甲斐なさに失望し悲しむ人等。悲しみの程度や質は様々ですが、どのような悲しみをとってみても、それを「幸い」と受け取るとは難しく感じられるのです。

主イエスご自身はどのように「悲しみ」と向き合われたのでしょうか。

## 【2】主イエスの悲しみ

ラザロの死に際して：「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、『彼をどこに置きましたか』と言われた。彼らはイエスに『主よ、来てご覧ください』と言った。イエスは涙を流された。』(ヨハネ 11:33~35)

イエスは死別の悲しみの中で涙する者を前にした時に、霊に憤りを覚え、心を騒がせ、そして涙を流されました。

弱り果てた群衆を見て：「また、群衆を見て深くあわれまれました。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。」(マタイ 9:36)

この「深くあわれまれました」(スプ ラクノゾ マイ)は、「はらわたがちぎれるような思い」というニュアンスのある言葉です。遠くからあわれだと眺めるのではなく、自分の問題のように居ても立ってもいられない状態です。主イエスは目の前で悲しむ者に誰よりも共感し、心の動揺を覚えお方でした。その主イエスが「悲しむ者は幸

いです」と教えられたのです。なぜでしょうか？

## 【3】嘆きや悲しみ

この「悲しむ」という言葉は、強い悲しみ、嘆きを表します。大切な人の死を前にした悲しみ、あるいは自らの罪に対する嘆きなどです。受け入れ難い出来事を前に、無力感、挫折感を伴う感情表現としての悲しみです。私たちは、そうした悲しみにできれば遭遇したくないのです。たとえ遭遇しても、どうしたらその悲しみを一刻も早く自分から切り離すことができるかと考えます。

主イエスは、そうした悲しみの中でもがき、嘆く者に「その人たちは慰められる」(4)と言われました。この「慰められるから」という受動態は「神がしてくださる」という慣用表現です(参照:6,7,9)。人を慰めることができる神が、悲しむ者は幸いと教えられたのです。

▷『父の涙』(岩渕まこと)：愛娘との死別の経験を通して、父なる神の悲しみを感じたという。悲しみの只中で、神の深い愛を知るという経験。

神の慰めは、一時的に悲しみを忘れさせるという意味での慰めではありません。瞬間的に悲しみが消失するということでもありません。神が、しかるべき時に悲しむ者を慰めて下さるのです。「主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。」(イザヤ 61:2)

